

細く強い電線を 産業用ロボットにも提案

オンライン技術
試作可
小ロット



細く加工した燃線（よりせん）が強み

業務内容 通常の電線から 燃り加工に転換

昭和21年に大阪市天王寺区で「遠藤電線」として創業した。創業当初は通常サイズの電線を生産していたが、電線の被覆作業はコストがかかることもあり、生き残りを図るため、細い銅線をまとめて燃線に加工する仕事に転換した。

その後、業容拡大に伴って本社を大阪府生野区に移転・拡張。昭和61年に大阪府富田林市の現在地に移転した。調達した細い銅線を使い、太い燃線に加工している。手がけた燃線は被覆を外注したのち、産業用ロボットのアーム部分や医療機器などに使われている。

強み 折り曲げても亀裂が 入りにくい製品を生産

0.03mm〜0.12mmと細い銅線を燃り、その100〜200本を1つに束ね、燃機を使用して太い燃線にしている。熟練した技術を持つ社員が、銅線に一定の張力を保ちながら作業にあたる。自社で銅線をボビンに巻いており、巻き具合や燃機にセットするボビンの位置決めなどの細かな作業の一つひとつや自作の口金が生産の出来を左右する。

そうしてできた製品は機器に配線する場合に、「折り曲げた時に亀裂が入りにくく、軟らかく配線を取りやすい」と石原年晃社長は特徴を説明する。ひねり回数を多くした銅線を使って燃線をつくり、より耐久性の高い製品を生み出している。

設備投資 将来の需要増を見込み 工場を取得

本社は、大阪府富田林市の企業団地に位置している。平成28年に第2工場を稼働

し、新たな燃機を導入した。新たな燃機はより細い銅線を絡むことなく、加工できる特徴がある。また将来の増設を見込み、平成29年に近隣の遊休工場を取得した。石原社長は、「本社の近隣は人気があり、ひとまず押さえておくことにした」と話す。現在は倉庫として活用しているが、ロボット用ケーブルの需要が急激に伸びつつあり、工場が稼働する時期はそう遠い将来ではなさそうだ。

今後の展望 新たな用途を視野に

今後は軟らかい燃線を展開することで、これまでとは異なる販路の拡大につなげていく。以前から生産する燃線はロボットのアーム部分に採用されているが、従来は固定用に限られていた。だが、可動用としての採用も見込んでおり、「信号を発信できるパワーケーブル向けにも期待している」と石原社長は話す。

また工場の生産工程の最適化や省力化などを背景としたAI（人工知能）の採用拡大や工場の自動化が、ロボット向けが中心の燃線事業の成長の追い風となると見ている。将来を見据えて生産体制を整え、商機を狙う。



一定の張力を保ちながら作業する



新設された第2工場

当社の歴史



昭和21年に大阪市天王寺区で「遠藤電線」として創業。昭和24年3月に「三洋電線」に社名変更。昭和36年に大阪府生野区に移転し、昭和61年に大阪府富田林市に移転しました。「銅極細線業界においてトップになろう」をモットーに「細く長く」を経営方針に掲げます。

代表取締役 石原 年晃さん

<http://www.sanyo-electricwire.jp/>

主な事業内容

電気用銅極細線燃り加工

主な取引先(納入先)

弱電メーカー

- 住 所 〒584-0022 富田林市 中野町東2-5-50
- TEL 0721-24-1245
- FAX 0721-24-1248
- 創 業 昭和21年4月
- 設 立 昭和22年3月
- 資本金 3,000万円
- 従業員 17名